

МЕТОДИКА ВИКЛАДАННЯ ЯПОНСЬКОЇ МОВИ

А. Кобаяші, викладач

Київський національний лінгвістичний університет, м. Київ

小林亜希子、講師

キエフ国立言語大学、キエフ市

ウクライナ人日本語学習者の日本語オノマトペに対する音象徴認識 ——語頭子音が阻害音の有声無声で対立するオノマトペの場合——

キーワード： 音象徴, 阻害音, オノマトペ, t 検定

はじめに

語は音と意味から成るが、この2つの間には必然性が無く任意で結びついている。このことから、言語は恣意的であると考えられてきた。しかし、これとは別に音が特定の意味と結びつくものがある。例えば、濁音は清音よりも「重い」「鈍い」といった印象を与える。このように、音が特定の意味を示唆する現象を音象徴と呼ぶ。オノマトペは、この音象徴の特徴を持つと考えられており、音象徴語とも呼ばれる。日本語のオノマトペの数は非常に多く、辞書に掲載されているもの以外にも、話者や作者が動作や音を忠実に再現する目的で「臨時的に」1回限りで作ったオノマトペも存在する。このような創作されたオノマトペでも、おおよそのイメージが掴めるのは、日本語を母語とする者に共通の音象徴が存在するためである。

本研究では、ウクライナのキエフ国立言語大学で日本語を専攻する1年生と2年生計110名（以下、調査参加者とする）を対象に、オノマトペの音象徴認識についてアンケート調査を実施した。調査参加者は、日本語オノマトペをどのようなイメージで捉えるのか。そして、学習歴や母語等の属性とどのような関連があるのか、そこに有意な差は見られるのか、t検定で分析する。オノマトペには様々な形態が存在するが、ここでは/z/-/s/, /d/-/t/, /g/-/k/, /b/-/p/のように、語頭子音が阻害音の有声無声で対立する反復形のオノマトペに注目する。

1. 研究の目的

調査参加者の日本語オノマトペに対する音象徴認識を、視覚・聴覚刺激を用いて分析し、彼らがどのようなイメージでオノマトペを捉えているのか、その傾向や特徴を明らかにすることを研究の目的とする。本研究は、オノマトペの教材開発や効果的な指導法を考案するための基礎研究として位置づける。

2. 研究方法

本研究では、以下の3つの課題について考察する。

課題①日本語オノマトペに対する音象徴認識の傾向を聴覚刺激から分析する。
 課題②日本語オノマトペに対する音象徴認識の傾向を視覚刺激から分析する。
 課題③日本語母語話者と調査参加者の日本語オノマトペの音象徴認識を比較する。

2.1 聴覚刺激による調査

課題①を検証するため、イラストと音声を使用した視覚刺激調査を実施した。まず語頭子音が阻害音の有声無声のペアになるオノマトペを15組30語用意した(表1)。

表1. 音声調査で使用したオノマトペ15組とイラストの一例
 調査では、表1のように有声無声で対応する阻害音のオノマトペを1つのペ

/s/と/z/	そろそろ(そろそろ)・ぞよぞよ(そよそよ) *ずやずや(すやすや)・ざーざー(さーさー) ずるずる(ずるずる)
/k/と/g/	ころころ(ごろごろ)・ぎらぎら(きらきら) *かみかみ(がみがみ)・ぐんぐん(くんくん)
/t/と/d/	とんとん(どんどん)・ときとき(どきどき) たらたら(だらだら)
/p/と/b/	ぶんぶん(ぶんぶん)・ぶかぶか(ぶかぶか) ぶるぶる(ぶるぶる)

*は存在しないオノマトペ



アとし、それぞれAとBの選択枝記号をあて、これらの音声を連続で流した。調査参加者は、まず手元にあるイラストを見ながら連続して2つのオノマトペを聞く。音声を聞いたあと、AとBのどちらのオノマトペが提示されたイラストによりふさわしいか選択する。声は1回のみで繰り返しはない。項目は全部で15問である。各問題の2つ目の音声にあたる選択枝Bの音声が流れてから5秒後に、次の問題に移るようにした。調査で使用した回答用紙の説明と指示は、日本語とウクライナ語の二か国語併記にした。調査参加者に調査の目的を確認後、サンプル問題へと導いた。この調査に要した時間は約7分であった。

この調査では、「*かみかみ/がみがみ」のように、存在しないオノマトペも調査対象としている。これは、本研究は調査参加者の有声・無声の音のイメージを知ることが目的とし、語の意味を問うものではないからである。選定されたオノマトペは、辞典に掲載されているアクセントを参考に、デジタルボイスレコーダーに録音した。存在しないオノマトペのアクセントは、ペアとなるオノマトペと同じアクセント形式で録音した。ウクライナ在住の日本人日本語教師3名にオノマトペを描写したイラストを見せ、そこからどのようなオノマトペがイメージできるかを口頭で答えてもらい、2名以上共通の回答が得られたものを調査用イラストに採用した。

2.2 視覚刺激による調査

課題②の視覚刺激による調査では、回答形式に二項選択法を採用した(表2)。語頭子音が阻害音の有声無声で対立する反復形オノマトペ1組のうち、一方の意味を質問項目として提示した。例えば、「感触が滑らかな様子」を質問項目とし、選択枝に「1. さらさら」「2. ざらざら」を提示した。調査参加者には、項目の示す意味により近いイメージのオノマトペを選択してもらった。この

調査では、オノマトペは平仮名にローマ字を併記し、その他の質問指示はすべてウクライナ語表記にした。

表 2. 二項選択法による視覚刺激調査

問1. 感触が滑らかな様子	1. さらさら	2. ざらざら
問2. 不快さ	1. しとしと	2. じとじと
問3. 水面に浮かんでいる様子	1. ぶかぶか	2. ぶかぶか
問4. 重い水滴が落ちる様子	1. ぼたぼた	2. ぼたぼた
問5. 液体の濃度が高く、粘り気が強い様子	1. とろとろ	2. どろどろ
問6. 甲高く、軽々しい感じの笑い声	1. げらげら	2. けらけら
問7. 非常にかたいものを噛んだ音	1. かりかり	2. がりがり
問8. 液体が容器の狭い口から脈打つように連続して流れ出る音	1. とくとく	2. どくどく
問9. ものを遠慮なく盛んに食べる様子	1. ばくばく	2. ばくばく
問10. ものが軽やかに続いて回る様子	1. ぐるぐる	2. くるくる
問11. 砕けたものや粒状のものが次々に大量にこぼれ落ちる様子。大粒の涙を流す様子。	1. ぼろぼろ	2. ぼろぼろ
問12. 軽くむせる声、また、その様子	1. けほけほ	2. げほげほ
問13. 鍋の中のものが、静かに煮える音、また、その様子	1. ことごと	2. ごとごと
問14. 粗くざんだり、踏みつけたりする時の力強い音	1. さくさく	2. ざくざく
問15. 動作が静かにゆるやかに行われる様子	1. そろそろ	2. ぞろぞろ

視覚刺激調査の他に、質問紙調査を実施した。調査参加者の「学習歴（1年未満／1年以上3年未満）」、「母語（ウクライナ語／ロシア語）」、「母語オノマトペ使用頻度（よく使う／使わない）」、「学習方法（漫画利用の有無）」、「日本語オノマトペ接触経験（見た・聞いたことがあるかどうか）」、「学年差（1年生／2年生）」の6つの属性の特徴と、音声調査や視覚刺激による調査結果の関連性を分析した。

なお、視覚刺激による調査に要した時間は約20分であった。

2.3 日本語母語話者との比較

課題③では、日本語母語話者とウクライナ人日本語学習者のオノマトペの音象徴認識を比較した。この課題では、主に反復形オノマトペの語頭子音に注目した。浜野（2014）は、語頭子音/s/と/z/の基本的な音象徴は「静か／軽い／小さい／細かい」と「重い／大きい／粗い」であるとまとめている。日本語母語話者にとって、「さらさら」と「ざらざら」では、前者の方がより軽くて細かいイメージが持たれるのである。この音象徴認識が調査参加者にも共通するものか、度数分布とt検定を用いてデータを分析した。

3. 結果と考察

課題①の音声調査において、調査参加者の間で最も正解率が高かったのは/k/と/g/のグループ（69.55%）で、最も正解率が低かったのは/p/と/b/の語頭子音を持つオノマトペのグループ（48.79%）であった。

この音声調査の平均点は1年生が8.609点、2年生が9.478点となった。t検定の結果、両学年の平均の差に有意な差があることが認められた（ $t(108) = 2.311$ 、 $p < 0.05$ 、 $d = 0.451$ ）。したがって、2年生の方が1年生より有意に点数が高いと

言える。音声調査で使用したオノマトペをすでに知っていた可能性も考えられたため、後日フォローアップ調査を実施し、調査参加者のオノマトペ認知度を測ったが、両学年ともに平均点が非常に低く（2点未満）、t検定の結果からも有意性が見られなかった。このことから、調査参加者は、予備知識の無い状態で音声調査に臨んだことがわかる。

続いて、課題②と③について考察する。視覚刺激を使用した調査では、/s/と/z/のグループの正解率87.05%が最も高い結果となった（表3）。音声調査と同様に、ここでも/p/と/b/のグループが54.32%と最も低い正解率となった。語頭子音/p/と/b/の反復形オノマトペのペアは、大小の関係で対立するというのが日本語母語話者の音象徴認識である。しかし、この調査による正解率の低さから、調査参加者の間には同じ音象徴認識が見られないことが窺える。一方で、「とんとん／どどん」（80.91%）のように、音とイラストのイメージが高い確率で結びつけられるもの、「さらさら／ざらざら」（93.64%）のように意味とオノマトペが関連付けられるものもあった。/p/と/b/のグループの調査結果から、日本語母語話者に見られる音象徴認識は、言語に普遍的なものではないと考えられる。一方で、「さらさら／ざらざら」「そろそろ／ぞろぞろ」の結果から、日本語母語話者と調査参加者の音象徴認識に共通点が見られることが分かる。

表3. 視覚刺激調査の項目別正解率と属性の関連性

	全体	学年		母語			グループ別 正解率の平均	
		1年生	2年生	ウクライナ語	ロシア語	宇・露両方		
/s/と/z/	さらさら	93.64%	92.19%	95.65%	88.89%	97.92%	100.00%	87.05%
	じとじと	80.00%	81.25%	78.26%	74.07%	85.42%	100.00%	
	ざくざく	82.73%	82.81%	82.61%	79.63%	87.50%	66.67%	
	そろそろ	91.82%	87.50%	97.83%	88.89%	93.75%	100.00%	
/k/と/g/	けらけら	44.55%	57.81%	26.09%	44.44%	47.92%	16.67%	60.73%
	がりがり	74.55%	68.75%	82.61%	74.07%	75.00%	66.67%	
	くるくる	74.55%	73.44%	76.09%	74.07%	77.08%	66.67%	
	けほけほ	60.91%	51.56%	73.91%	53.70%	68.75%	66.67%	
/t/と/d/	ことごと	49.09%	46.88%	52.17%	50.00%	56.25%	0.00%	55.45%
	どろどろ	50.91%	56.25%	43.48%	48.15%	54.17%	33.33%	
	とくとく	60.00%	71.88%	43.48%	64.81%	54.17%	66.67%	
/p/と/b/	ぶかぶか	69.09%	60.94%	80.43%	74.07%	64.58%	83.33%	54.32%
	ぼたぼた	59.09%	64.06%	52.17%	53.70%	66.67%	66.67%	
	ばくばく	50.91%	65.63%	30.43%	44.44%	58.33%	50.00%	
	ぼろぼろ	38.18%	34.38%	43.48%	40.74%	35.42%	33.33%	

語頭子音が/s/と/z/のオノマトペの基本的な音象徴については、2.3でも述べたとおりである。しかし、日本語の音象徴には、基本的な意味から離れ比喩的に意味が拡張することもある。本研究では、基本的な意味を持つオノマトペ、例えば「さらさら」の正解率は高かった。しかし、/k/の持つ基本的な音象徴である「軽さ」から比喩的に意味が拡張し、「軽々しい」となる「けらけら」の正解率は低くなっている（44.55%）。ウクライナ人日本語学習者にとって、この日本語オノマトペの「意味が比喩的に拡張したもの」は、そのイメージが掴みにくい傾向にあると言える。

4. 今後の課題

まず、本研究の調査結果が必然的に得られたものであるか検証するために、今後も同様の調査を実施する必要があるだろう。

浜野 (2014) は /p/ を語頭子音に持つ語彙は、外来語を除いてオノマトペにしか現れないと述べている。このことから、日本語母語話者にとって、語頭子音が /p/ の語彙は、外来語かオノマトペであると判断する基準になり得るだろう。しかし、本研究の調査参加者の間で、/p/ を語頭子音に持つ語彙を「オノマトペである」と判断する傾向は見られなかった。ウクライナ語のオノマトペの特徴のひとつに、

Melnyk (2008) は、/p/ の生産性の高さを挙げている。今後、ウクライナ語オノマトペに見られる /p/ の意味的役割に注目し、どのような特徴があるか検証する必要があるだろう。

本研究では、語頭子音が阻害音の有声無声で対立する反復形のオノマトペに注目して調査を実施した。/p/ と /b/ は、音声学的には対立している。しかし、表記の面から見ると、他のペアが「清音—濁音」であるのに対し、/p/ と /b/ は「半濁音—濁音」となる。この違いが本研究の調査に何らかの影響を与えた可能性も考えられる。「ば行／ぱ行」とあわせて、「は行」の音象徴認識調査もすすめていきたい。

おわりに

本研究の統計学的分析では、2.2でも述べたように6つの属性を用いて検証した。その結果、有意差が見られたのは「学年差（1年生／2年生）」のみで、属性が「学習歴（1年未満／1年以上3年未満）」の場合では有意差は見られなかった。質問紙調査では、日本語オノマトペを「教科書で見た」と回答した者が多数いた。つまり、フォーマルな学習環境で習ったオノマトペが何らかの形で記憶に残り、調査結果に影響を与えた可能性が考えられる。初級学習者に対するオノマトペの指導については、様々な意見があるが、本研究の質問紙調査では、多くの学習者がオノマトペに高い興味を持ち、学習の必要性を感じていることが明らかになった。以上のことから、初級レベルの段階でオノマトペを指導する意義を見出すことができたとと言えるだろう。

【参考文献】

阿刀田稔子・星野和子 (1995) 『擬音語擬態語使い方辞典—正しい意味と用法が

すぐわかる』創拓社

小野正弘編 (2007) 『擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典』小学館

浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ——音象徴と構造——』くろしお出版

イラストAC <<https://premium.ac-illustr.com/>>

Melnyk I. (2008) Фонетична структура українських ономапопей як джерело вивчення національно-мовної специфіки/ Мельник I., К.: Рідна мова №5, с.10-12.